教示伊日記

後篇

五

962
10上

13
962
10

書のあるを奪ひ将て山岡へ呈ぐまば、玄番允披閲して原来
原来ごハ修験めが屈死せる疑獄の訴状なり恰好も奏功
なるハ吾高運の做ところなり匹夫を活置てハ後日の妨いと
一刀に截断くまんと大の眼を怒らし、鷲破佩刀を脱んとす
阿呀雲時侍玉へ那下萠め大官人直に御手を御まんハ
勿躰なし、小的が取置に任せ給へと声をかけて禎を披
出来るハ別人ならず日外窟を破りて逐電したる豹藤内な
て蚤ちうの邸に舎匿居たるるうぢの時豹藤内ハあらあ人鞭
を把もあへず、徳兵衛が背より臀にうけて策徳兵衛ハ其儘
阿と呼びて俯に仆ると、連こ畳こて隆ことひと折に折ハ鮮
血滚こと九穀より迸て出憐むべし一點無罪の良民かく

山岡が非道の為ゑ一朝草葉の露とぞ消ゑる。豹藤内うち
密語、この屍の捨やゝ如くせばよからうと議ゑ。玄番允うち斃
頭藤内做得汝よきゑ計へと道ゑ浩處縣の了頭ども慌忙
出来。相公早く内房へ入せ給へ。今日ふん和子君ゑ物怪の附て
侍るゑと。喘吁〻。玄番允大ゑ駭き直ゑ帳内を望ミ一烟走ゑ
跑入ぬ。さとはまづさておきて。駒澤次郎左衛門春雄不科災
難ゑて御不審と蒙ゑ。當分冷泉帶刀ゑ預けられしゝば
いゝ〻慎と只閉籠てぞあらゝる。伊人生得天の縱る英才ゑれハ
策を惟幄の中ゑ運らし勝ことを千里外ゑ決すゝゞ〻今
かく閑居ゑ在ふゞ只顧治國の爲ゑほど〻肺腑と腦ま。夜
毎ゑ仰で乾象を觀るゞ今宵も獵ゑ田来る東主帶刀と

共ゑ露臺ゑ上りて。やゝ天丈と觀了て。阿呀兒星已ゑ光芒
を失ふ。國敵ゑ運數盡たり御家安泰の表喜ゝやとゝ
帶刀いへらく。ゑらゝ何等の事ありてか國敵速ゑ亡ぶんと
も果ざるゑ駒澤外面と下見ゝ。ハ怖ゝ一道の怨氣北よりして
南ゑ墻外ゑ屈死の者やあらんずらん。帶刀殿いそゞ査あれ
と道ゑ。帶刀いんと得て即下とち若黨等ゑ後門と開うを
竊ゑ田看ども。いと冥暗き深巷時已ゑ樵樓の三鼓を報て交
加非ゑ人斷ゑ時ゑりあゝて煞沙と声轉して四五個の走卒
等恠の紋つけゝ提燈を先だて。一擔の吊臺と擕来帶刀ゝ
後門と行過るを。帶刀やとゝ喚止若黨ども〻ゝ令して油蕈を拔
除させ燭と照してよゝ視まバ。ゞ嫩やゝ蒸菁葉蔬がゝ

種々の菜蔬を堆く盛てぞめくる。帶刀ハ蹲居走卒どもを屹と
と睨み。奴輩ハ誰が内の者ぞ。ねどてか。夜陰よおうび。何所へ
這の菜蔬を拿ゆくぞと詰問まて。走卒等戰き〳〵吾們ハ山
岡が下從よりが。今日不料公子よ鬼注が附て侍るゆへ家公〳〵
上の庄の天寧寺へ大般若の祈禱と托を申さん。大衆へ明早の
饗膳の聽用ぞうふと夜深ぬがら菜蔬を餽申さるまてんと陳じ
けるよ。帶刀更よ信然とせず。直よ手の者を令て那の走卒等
と圍住吊臺とバ裏頭へ擧入させ。即時菜蔬を除去させて檢査
見よ。果して一個の死屍ぞ露出る。走卒等ハ瞠目頓口て。面色
乍土の如し。帶刀ハ眼を怠ち。汝等ハ殺人の同類かとども科を
赦て助け回すほどよ。厚く想ひその屍をとり〳〵閣回を。汝が主

ハさらまり。誰よもあれ。倘この事を塵ごろも失口よおのてい
早速拘到縛馘を研ちむべし。と嚇さきて。走卒等ハ大家ゑ
低〳〵と寒戰出し。咬牙各地よ俯伏て合爪ぶう〳〵恕命の
恩を謝し。強て脫たる腰を伸號く臺玖荷去ぬ。駒澤次郎左
衛門出來屍を檢さぬハ鞭瘡とおば〳〵肥肉よ紫青色の
痕印たまども。總て致命處をとづれさう。ねを治をべきハ檀中
ふ微〳〵一縷の生氣殘まうと。やをら熱き手巾の類よて遍身
を蒸し温めさせ。木乃伊を許多飲しむまバ。時こうりあうて
死者ハ吻と息噴迴し。兒角ちてや言不どよ。ねうるゴ。ハ
夜よ豹藤内よ壐殺されたる木綿屋德兵衛ねう〳〵沒郎左
衛門その口欵を聞糺。熟〳〵帶刀と謀て。火速荻野祐仙玖

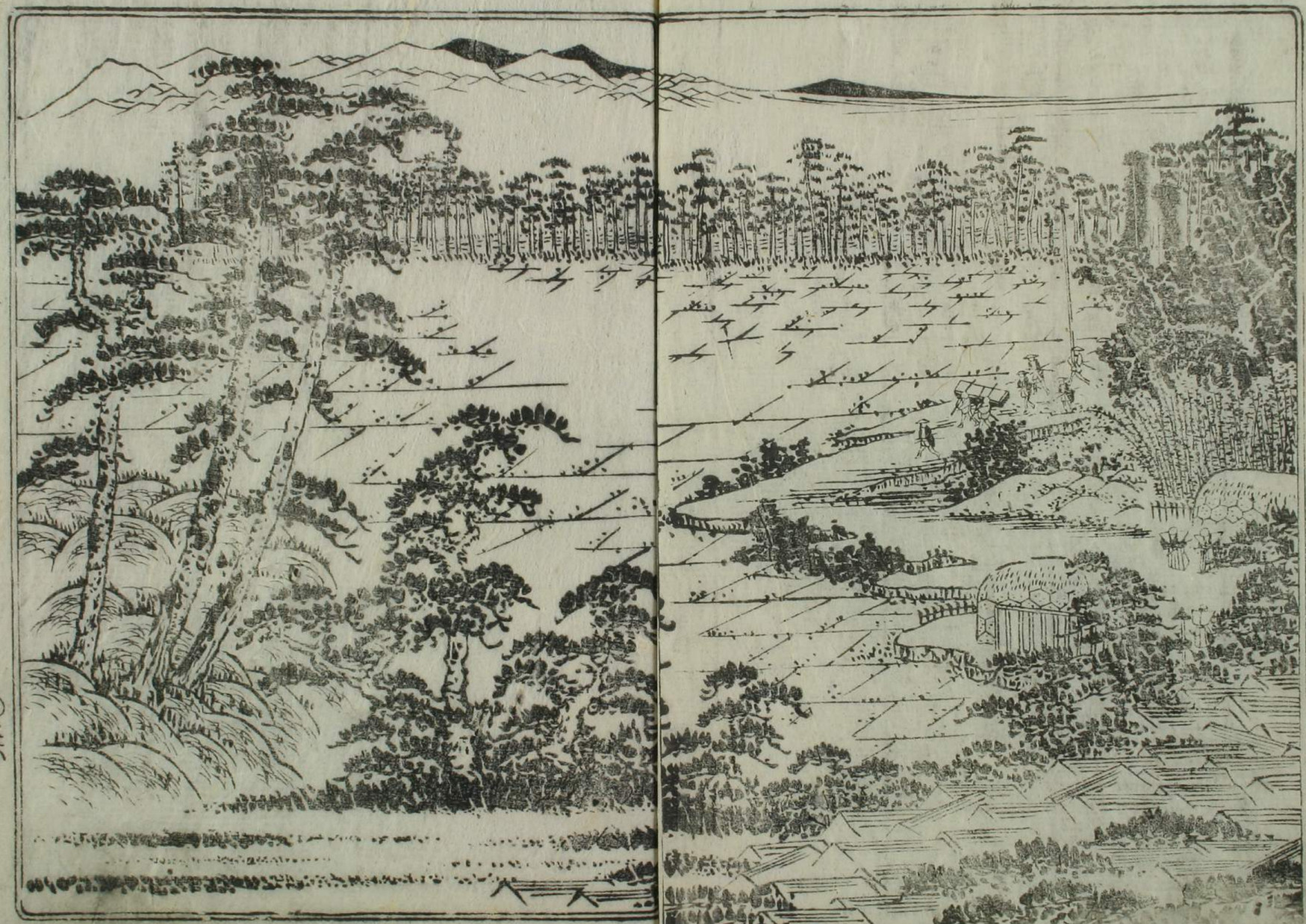
駒沢智國と安しず
○安左加保　巻七
○安左加保　巻七

拘到来らせ。直ゑ拷門ゑ掛しゝば。祐仙ハ責苦ゑ堪ねて
山岡玄番が岩代瀑布太を荷擔。叛逆を企てしゝ。豹藤
内ゝて。頗膽略もある彼臣を扶持。萬の叅謀と。種々の陰匿
と計較る一五一十を。おちもれく吐露せり。さてまゝと今旦も
山岡が一子千鶴丸ゑ邪魅の附たる所以を何如ふと尋るに
家公の留主の徒然と慰んと梅香了鬟輩ハ。僅く八歳の千
鶴丸を傳て。看樓の擂子より通衢の往来を下視し。何く
ゝと嘯ゝていと喧し。日もちろ〳〵の入るゝ一個の弄蛇兒
が經過るり。例のやうゑ擂子の下ゑ在て百般と蛇を弄使て饒
舌るゑ。侍女どもハいと興が了て餘念なく。いつゝ簾子をさへ
過半捲りけるゑ。和子い乳媼が膝ゑ尻りけて在すと。弄
蛇兒ハゝを以えるゝ。何やらん念々有声て。已が領ゝ蛇を
ほどけば。這の蛇晃くと閃くて看樓の裏ゑ飛入る。侍女共ハ肝
と吽びて忙惑へるその間ゑ。那曲者ハ何處へか往けんゝいれ之ず
ぞ消うる。千鶴丸ハゝをゑ驚き急驚風られ。大熱灼が如くれば
拘傅乳媼ハ安らずおりひ。忙ハしく内房へ抱き行て。種くゑ勞まゝら
それば侍女どもハ醫師ゑ禱師よとたぐ騒ぎゑ騒ぎ。總て人心地もゑし
悪ゑも強く愛ゑも強を山岡殿。歸端とをゑ。韋駄
天の如く内房ゑ跑入て。母ゑき愛子ハ一入可愛さもい
やまさる。千鶴丸が病床ゑ襯き。肚腹ゑど撫摩つ見て
あるゑ。ゑハいうゑ。いと腥き蛇の鎌首立て山岡が睨みたるが。
紅の舌ゑ巻ら〳〵と出し。幾尋ともぬく雉の腹と巻ゑ

たるハいと可悪まさ凛ましげるう。さしもの山岡も呆果て。只是夥の験者と聚めて。多方禳法を做さしむまども。何の効もあらで。稚ハ倍煩悶しゐる光景おもび。玄番名ハ茫然として困ぞうつてぞ在しゐる。かくて省顧よ来る同紋衆の勧よ任せて。名たゝる侘伯一清軒を招うしむ。玄蕃ハ東道支度して待よ。一清軒詰且祭て。その托を允ひ。軈て卦を起をよ又山風蠱を得う。一清や〳〵霎時思唯さて〳〵やう。ハ山風蠱といへる卦よて三毒盤の上よて相食の兆形り。三毒とハ蝸牛蟾蜍蛇の三毒なり。去るに今寒爻ふようて味ハひ侍るよ。大毒已よ中毒小毒を併食して只一毒とるり。妖氣最深重。唐土よてハれと金蜑蠱毒

とゝ。世の所謂犬神とまれ〳〵。さまゞバこの邪祟中〳〵尋常の加持祈禱の禳べうもあらず。拙老も平常の蠱毒ハ頃日も泰山府君の法と修して禳除たまど公子の患たゞハ鬼注ハ一方ならぬ大毒形をバ。拙ゞ浅術の及所よ侍らぬとゝ入山岡ハるとも懈怠よ禳除の法と需て止ざるゝまバ。一清や沉思せゝ。有有有。卦象よ蛇亀小因むの意あゝさあれバ玄武神聖の霊威よて。容易この邪祟と除くべゝ。その法ハ従来顕聖ある霊符の尊像を設けて。血よ一頭の亀を貯へ。妙見大菩薩の大黙を修ひ給ゝ。蠱毒立所よ退散すべゝ。必ゝも疑るべからず。倘又三十四時を過されバいゝゝうその詮ありるべゝと。最鉄口もいひ放ぬ。山岡ゞ

逆意の事も。歴然と卦面に見えれども。深く忌諱を避聊か其色とも顕さざりしかや。玄番允秀門ハ一清軒が明斷に服し。聞しに優る國手かなと厚く賞して回しける。時しも生憎と御館より急の御召あり。よぞ玄番允ハほどなく。宮迫たまども。嚴命辭がたく。只得登城せんと出かけ。豹藤内を機密房に呼よせていへやう。賤息が禳法ハ時刻の期あるとバ。汝に一大事仮托れたくなり。そハ如くせよと私語おいて。陪徒を將て出でをけり。ときハこれ山岡が豹藤内と已が腹心と援思へる故なりけり。玄番允秀門ハ早御館に候て例の席に着よ。てや長臣等ハ起光来て詰居たり。時ぞうありて駒沢次郎左衛門何の間に縱禁ありしが。麻社祀の襞積整く。温くうち上て。正面に坐を占ていへやく。小臣不肖ながらも。今日事の裁判ハをべき釣旨を蒙りたまバ。高坐御免と式代せり。冷泉帶刀やをら令を傳。訴人木綿屋徳兵衛犯人荻野祐仙を書院の白洲へ拽出さしむ。山岡玄番允閃と看りて猶き得て面土色の如く。岩代瀑布太と眼を相看せ。各懐鬼胎逡巡せり。駒澤次郎左衛門威儀を正し。各槙て奉承昨夜まつ斯くの事あり。木綿屋徳兵衛義生して審に申出ハ。早速祐仙を拘到。痛拷問にかけし所。叛逆の張本山岡玄番允岩代瀑布太と合夥君を幽籠奉り。已が子千鶴丸を儲君とし。大内家の社稷を奪んと謀て。又小臣をも黙人と祐



仙よ命金子もて徳兵衛が兄修験伽縷羅院が命を買得。小臣へ寃の難題を声言。且渠よ自害せしめて小臣が雪寃の滅口とさせたることども逐一白状して。玄番允瀑布太が罪科。已よかく顕然たるハ。天網恢々疎にして漏さしとハ此事ならん。と叙よける。玄番允ことを聞て呵々と笑ひ修験がことハ姑息。我を叛逆かぐくハ何等の讒語ぞと云いも果ぬよ。瀑布太も怵ず居丈高よ形りて。小生とも謀反の荷擔人とハ旁痛し。そハ什ぞ歴然う證拠の侍るや。和殿こそ真の叛逆人ふまと。霊符の一軸と豹藤内よ盗取せる事ハ渠が白状明白なるよ。上意呼こう心得ぞと念を發して朝ゐれども。次郎左衛門ハ見向もやらず何呼祥一ハ何處よ在。早く来まと高やうよ呼びけまバ。掖房とう波と應て豹藤内とハ方便の假名實ハ駒澤了庵が賤息祥一。山岡殿へ見泰せんと呼りけく。立流よ打份。右の手よ三方を拿左手ハ千鶴丸の手を携て悠くと坐よ即バ。山岡見こう。原来豹藤内目ハ駒沢う間牒よて在つるう。謀得つと想しよ謀らまこそ朽惜れと。天と仰で長嘆し。あの三方ハ我よ賜剣自盡との結構ぞるうと。熟視バ。短刀よハあらぞして。亀を纏へる蛇と載てあうぬ祥一こそねて。自家弱冠よて父了庵が勘當とうけ。本藩を亡命甲賀山よ隠を居て忍術と修行せし小其頃痘と病て面容變人よ認めらまぬと幸と。義兄次郎左衛門密

を呼下し。父に代りて勘氣を許さる嚮に霊像の失る當時貴殿の手より修験を捕らと次郎左衛門謀叛せりと寃を云かけるおそろし。計に就て計を行るゝハ。孫呉が秘奥なりとて兄次郎左衛門より奇計の指揮を受間牒となりて貴殿方へ入込駒沢と罪せんとハ修験一個にてハ放心不下と貴殿に一計を進り寶藏に躲入曲意捕ハまてきらせ〜ゝ。從来那の一軸ハ貴殿竊に匿置をしとい四相と悟る次郎左衛門疾くこれを察昨日毒蛇を児をして千鶴丸へ金蝿蠱毒を施させたるに。貴殿まと一清軒が易斷を信じ自家に一大事を発し。霊符の尊像を迎さまろ四へ小的即驃襄を做して頓に推の息注を禳驅正實と落掌一軸ハ。次郎左衛門が指揮ふり千鶴丸の田忠の手土産こゝ。適間鉤座に呈上たりと いひ演るふぞ。玄番允今ハ一語の抵瀬ことゝなく。忽地小罪ふ伏し。且駒澤が寛厚なる所置を善し。猛き心も自然と融け。次郎左衛門ふうち對ひ。かく裴覺うへハ是非ふ及ばす。いで殺身せんと肩衣刎まバ。瀑布太も共肌甘げ。已に自害と見えゝり次郎左衛門忙これを止め貴處ハ舊こと公族大夫君寛仁に在せバ。血で血と洗事ハ做させらまじ。孰公裁を待めさまに。私に切腹して御殿を汚さきんハいかゝ罪を累ぬる道理。まゝ瀑布太主も死を止まり。過を改らまと。出まとう無二の忠勤あまと。足下迚の才幹を公忠に施さるバ。實是國事に任る人。功を以て

罪を償ふ例もあり。曲て小臣が諫に從まゝに多方演說よ。君候ハ適間〻〻。御上段の隔簾〻〻の光景と透窺あらせらるゝ時次郎左衛門をちらく召まゝ「次郎左衛山岡が家禄ハ千鶴丸へ申〻にくるぞ。鴻臚ハ隱居させよ。その餘ハ汝が可由自裁に所置といひをて入せ給へバ。次郎左衛門波波と俯伏てうち慟を領ぬ

二十回 壽

さきバ駒澤次郎左衛門ハ殿の鈞旨にまゝせ。岩代瀑布太が死罪を赦〻。已が屬吏と做〻て。海田開發の惣司たらしむ瀑布太ハ殿の御惠に感感ると想ひ。又駒沢が恩をもて仇に酬たる好意を好〻。乍邪心と飜〻。悪に強けきバ善ハも強とくぐ〻いち早く忠功を建て。舊悪と償さんと。種〻に夫と凝〻。勞勞と厭ハず努力をて。夫を使こと度をくづさず寛やかに物〻て速に成駒沢が指畫のごく。多年ならばて遂に幾千町の腴田とぞ闢きける。但這の新田の隄防ハ夥の閘と設たきバ。旱天に水閘を閉。雨濕に水閘を開て。落潮張と落〻に故聊も水旱の損なく。萬〻歳の寶地と成るとかや。駒澤ハ舊新田と闢こと古田荒るとて好まざるも這の仟田の新法ハ。又十全の國益と査勘出〻て闢せたるよし。かくて駒澤が執成によて木綿屋德兵衛ハ孝行奇特者なりと褒させらゝ御城下に於て販布買賣の惣問丸に仰せ

つけられ侍ハ年を經て財累巨萬今こそ老母を安樂ふこ養
ける徳兵衛入貲財と費して一宇の梵刹を營しい兄伽縷
羅院ゞ菩提を吊らゝためふせ〳〵とぞ。さてこそ荻野祐仙い駒
澤ゞ胸襟ゝて死刑一等を宥らを深山へとしこめ置。生涯
山を出ることを許さまず。駒澤まゝ橘雞菴ゞ一切を賞し
名と雞作と更めさせ一株の夫頭しゝ爭て新田の出夫世
話ゝも與ら志めゝ。かゝし後ハ國泰ゝ民安く。雨調風順年
年五穀豊登て遠遺とゝを拾ハず巷夜扃ず明君の徳化
の然ら志むること。いひふゞら分國ハさらゝそ異國までもこれ
ゝ化せらを。風俗移易て民ゝ淳朴ゝゝまさりて當初の
人肉經紀ゝどハ跡ゝくゝゝゝ大内介殿ハ祥一ゞ今般の

勲功を賞せらを。新知五百石を賜ハゝ騎士列ゝそ做され
ける。ゝ次郎左衛門をバ當路職ゝ登庸たまひゝ。ゝ帶刀
ゞ吹噓ゝて已ゝ代〳〵めなるゝ。帶刀ゝ忠實の武人ゝ
し。加旃ず帶刀ゞ好意ゝて兼て聞知る秋月氏との良緣
と玉成せんと。筑前路岡へ話談ゝるゝ弓之助も當時ハ加
官進録〳〵て大宰家の國老とゝ居たるゞきの好音と悅
渾家水青女児深雪ゝさのゝ面語せて。帶刀ゞ媒妁ゝ從
せ。日をトゝて。粧奩ゝ美と盡〳〵さるべき家長を傳
て。深雪ゝ山口ゝる鳥衣巷へ送ゝ差〳〵ゝ。さてゝ〳〵深雪ハ
浅香を勝とし。乳母真柴とも傳ゝて。今宵ゝ人郎君の
邸へ入輿をゝ〳〵ゝる駒沢次郎左門春雄ハ。花燭形のごとく

物してめでとく合巹ろへる。春雄はさきまでも新人ハ全
然失明とのミ想ひ居たるゞ、洞房ゟ入来渠ゞ帽子を脱
たると看るゟ、這いいうゟ。深雪ゞ銀海ハ瑩るまでその光澤
秋水のごとく澄まバ比先宇治明石ゟて見しゟハさゝろ
からゟや百倍も近優して雪膚花貌。天然の艶色貴ゟ
媚て。究も毛嬙西施と欺くべうゟ。春雄ハ喜出望外
いとゞ心ときめきて又しも洞房の觴を相斟相酌。深雪ハ
今宵の團圓と嬉しミ。あるい来方の艱苦しさ〳〵もとか
たらいづ。春雄ハ府中の驛門ゟて。深雪ゞ零落し形状を
見て。只顧痛ハし〳〵想ひくらしぞまよう後の事を一切ゟ
ねバ案ゟ相違しゟ今深雪ゞ容易盲の明たると訝ゟ

そのゆへを謝ゟ問ゟ。深雪回答ていへろゝ。郎卿ゟ
冤の難ゟ遇たまひしと聞。身も世もあらまゝ。土地菅
聖廟を禱とて朝し冷けき水ゟて垢離と掻侍しゟ自
然血逆も下降しゝと心地さハやぎ。かけまくも御神の垂
て。某の日偶と日月ともゟ明侍てき。春雄ゟを聞よう
指を屈て日を筭ゆまバ。恰ど已ゞ冤の白たる日ゟぞあろゝ。
春雄ハ今ゟ始ぬ神霊の灼然ゟること成渴仰せう。かく恩
愛ゟく語らふうちゟ斗轉星移バ。真柴浅香ハ翠帳と御
て避出るふ。両個の夫妻鴛鴦の衾とうち襲ね。鸞を轉し
鳳と倒し。汝貪吾愛と綢繆ゟ。互ゟ巫山の夢路をぞ歩て
けるゝ。かくて深雪ハ。室津ゟる亡バのお六ゞ庇を忘まず。熟く夫

主と議し、一介の使を差て、登時の身價の十倍なる金子幷
ビ吉兵衛へ與せ又數の絹帛幷おこへ贈りて、その謝意を
表しぬ。深雪まゝ已ゞ套房金幷出し、人と共に赤
馬ゞ関なる遊女小支那ゞ身代償ハしめ、常ゝ來去る
雞作とハ倚情あるゝを知て居まバ、渠ゝ妻せつ、後來
深雪ハ男女の児を夥産けるゆゑ、次男某をバ岳父弓
之助請養て已ゞ箕裘を襲しぬ。一年鎌倉殿より
駒澤ゞ經濟の大才あることを聞召およばせらるゝ御眤
近ゝ擢用ハるべきとの御教書到來せしかバ、大内介満興
朝臣大命と謹承給ひ、即日次郎左衛門を召て御諚の趣幷
鈞命たまへバ、次郎左衛門感激奉承を稟あげ、舊主ゝ眷戀

ハ盡せれども、只得秩禄を奉辞、御休暇を願ひけるバ、満興
朝臣御鈞諾あらせらるゝて、渠ゞ知行三千石を同家祥一郎
小賜、舊の持高併て三千五百石とし、騎隊長ゝぞ命られ
けるゆゑ乃駒沢ゞ功勞を報せらるゝ故ゆゑ、ゝまゝ
次郎左衛門ハ舊姓ゝ復し、宮城次郎左衛門春雄と名告
家眷携帶して、遥〻鎌倉指てゞ起程ける。奴〻深雪ハ故
小大津の驛ゝ舍て、父老土人どもと呼出し、夥の資財幷
頒與へて渠等ゞ舊誼を謝し、又海道一路の処〻ゝて、些一の看
顧ゝあらゝる者どもゝ有差ゝ物を取せ、一飯の德をだゝ酬ひ
ざるハまゝなく、不日鎌倉ゝ到て參上せるゝ聞あげしゝば
程なく召出さゝて拜謁をゝるゝ君ハ速ゝまゝ満足せゝと

の大命あらせたまひて。即坐に五千石餘の采地を賜はり。左衛門少尉にぞ做さるる。春雄は是〻宮城新左衛門尉と称し親軍侍備とぞ〻なせしは。當初本國菊池を退身たる時の舊志を遂たるなるべし。金吾春雄が輦轂下に在て忠勤功勞尤悉せり。勲蹟は更に禿筆に記べうもあらざりしが止ぬ允後春雄沉思に功成名遂て身退は天の道なりと。一通の表を呈げ。強て白骸骨奉りぬるに。ぞ古びよ〻帰老を許させ給ひ給ればる春雄深く君恩を叩謝ぐ。即日に妻深雪を將て故郷にぞ帰ふ筑紫潟へぞ起程ぬる嫡子春盈恩命を蒙むり。父が家督と継て御扈從に左右その餘の男児女子も總て肉食者に脩身たる故今遠行に臨む些の遺憾もあらざりぬる。かくて春雄夫婦は肥後の境に入りぬるどもも。今の國守も菊池典厩と称し。故頭殿の御曹子なりぬるが。鎌府に參勤せられて在府あらふく時にぞ己が明弟とせる因あつぬるにぞ。巳が下向を聞せらるるにぞ極てその款待あらんことを尤憚て。異様に假扮して經歴。逐に阿蘇の御嶽に登て得て。浮世の人の尋ね来ます所幽僻なる風水とトて。亂雲堆裏に茅廬を結び。丘壑を愛し。猿鶴を侶とし。爰に天年を養てその竟る處を志らず。詩の一證とす。

當復入州寛作期人間踏地有安危。風流丘壑真吾事。籌策廟堂非所知。白水春波天澹々。蒼峰晴雪錦離々。恰逢居士身輕日。正是山中多景時。

後来ある山賤が山又山に伐入るに。邂逅認しはその人にぞあらん

大抵百歳を超つべき態よて。世の散楽を漁する高砂の尉姥のやうよて。仙風道骨と具て。顔色ふを光滑した夫婦の老人を値遇きと語りたるもいと芽出き例ゝぞあるる

朝顔日記巻之七 大尾

各邦書籍發兌

浪華

心齋橋筋北久寶寺町通角

三木佐助梓